

言語変異の社会的意味と言語イデオロギー

太 田 一 郎

【キーワード】 言語変異, 社会言語学的風景, 変異の社会的意味, 言語イデオロギー, 言語変種形成

【要旨】

言語変異の社会的意味を, 社会変数として利用される既定の社会カテゴリーの反映ではなく, アイデンティティの構築と言語イデオロギーという点からとらえ直すことを試みた。

1. はじめに—相関主義の問題—

1960～70年代におもに欧米で行われた都市方言を対象にした言語変異の研究では、日常言語に観察される変異が, sex, age, social class, ethnicity, style などの社会的要因と相互に作用しあっていることがあきらかになり、社会的要因と言語変異の間の相関関係に着目することで進行中の言語変化を観察することが可能となった。Labov や Trudgill らの研究によりあきらかになった言語変異の規則性は、ある speech community 内での変異の使用に一定のパターンが見られるという事実によって確認できるが、その規則性を見出す基準は社会変数との相関によっている。たとえば、Labov (1972) においては、言語変数の使用が social class によって層状化していることが示された。このように、言語にあたえる外部要因の影響を相関という形でとらえる姿勢を「相関主義」と呼ぶのであれば、変異理論のアプローチはまさに相関主義である。¹⁾

Labov 派の言語変異研究からは、ことばと社会の間に見られる相関を利用してすぐれた知見が得られた一方で、相関関係の存在が理論上重要な意味をもつため、変異理論は「相関関係だけでモノを言う」という誤った形で理解

・ 本稿は、平成13-15年度科学研究費補助金基盤研究(B) (1) 「日本語諸方言に見られる中間言語的変異研究—言語変異理論の立場から—」(研究代表者: 太田一郎 課題番号13410193) による研究成果の一部として報告書に掲載したものに、加筆・訂正を加えたものである。

されていることも少なくない。²⁾ Weinrich, Labov, and Herzog (1968) に述べられるように、もともと言語変異研究のおもな目的は、進行中の言語変化をとらえ、そのメカニズムをあきらかにすることであり、ことばと社会的要因の相関を求めるのは、変化が社会の中のどこからどのように広がり、どう埋め込まれていくのかをさぐるためである。そのためには、ことばを変化させる話者が社会のどこに位置し、どのような行動をとるのかをとらえる必要がある。つまり、相関を求めるのは方策なのであり、そのことが最終の目的ではないのである。

しかしその一方で、その相関の求め方に問題がないわけではない。相関は通常独立変数である社会変数と従属変数である言語変数との間に求められるわけだが、じつはその社会変数のとらえ方そのものに問題がある。たとえば、生物学的性 (sex) にもとづく話者分類では、「女性の方が標準形を (多く) 用いる」というように結果が提示されることが多い。その理由には女性の社会的地位の不安定さなどがあげられてきたが、このような考えについては「ことばとジェンダー」の研究者たちからはきびしく批判されている。変数や社会的威信などの説明要因がかかえる問題が十分に検討されないままことばと社会の相関を求めることは、きわめて危険であると言わざるをえない。言語変異はそもそも何を表すのかということを明確にすることなしに、むやみやたらと変異の分布に相関を見つけても何の意味もないことはあきらかである。

そこで本稿では、現行の社会言語学、言語変異理論の研究成果をもとに、言語変異と社会変数の関係を分析することにどういう意味があるのかという問題を、社会内における言語変異の意味とその意味を生み出す原理という2つの点からとらえなおし、今後の変異理論研究の可能性について考えてみたい。

2. 言語変異の重要性—変異の社会的意味—

2.1 変異の意味を求める

Weinrich et al. (1968) は、年齢、性別、階層、スタイルなどの社会的要因による差異、すなわち「秩序ある分化 (orderly differentiation)」を示すこ

とで言語が社会の要求を満たすことを指摘した。特定の変異形の使用状況からは、階層、年齢などの話者属性がある程度推定できる。つまり、日常の言語使用において、言語変異は話者情報を伝える機能をもつ。また、発話場面のフォーマリティはスピーチスタイルに反映され、変異形の使用頻度にことなりが見られる。われわれはこのような変異形の使用から通常何らかの情報を得ており、これらはしばしば言語変異の「社会的意味 (social meaning)」(Eckert 2000), 「社会的重要性 (social significance)」(Chambers 2003) などとよばれる。

Weinrich et al. (1968) 以降, おもな変異理論研究においては, 言語変化を方向付ける社会的要因を取り込んだ理論の枠組みが考案されてきたが, 何が言語変化を促進する要因になるかを考えるとき, 変異にどのような社会的意味が付与されるのか, およびどのようにしてその意味をもつようになるのかはきわめて重要である。なぜなら変化は今この場で起きており, 今この場で言語変異の社会的意味がとらえられれば, それが言語変化にあたえる影響が考察可能になるからである。

言語変異がどのような社会的意味をもつかは, 社会的意味とはそもそも何か, どのような過程をへて構成されるものなのか, 具体的にはどのような形であられるのか, どのようにして社会による意味の付与は行われるのか, さらにその社会的意味が言語構造にどのような影響をあたえるのかなどが, 調査対象の集団が存在する社会・文化的文脈も含めて検討することによってあきらかにされねばならない。

本節では, 変異の社会的意味の定義とそれが構成されるメカニズムを言語の標示機能の点から, そしてその標示機能によりあらわされる社会的意味とその具体的な形について, 中村 (2001), Eckert (2000) を参考に論じてみたい。

2.2 社会的意味の標示

中村 (2001:103-4) は、言語形式があらわす社会的意味は、内容を「指示する (referring)」機能ではなく、「標示 (indexing) する」機能により表示されるものだと言い、その意味として次のようなものをあげる。

- (1) a 言語で伝えられる内容に対する話者の気分、感情や認識などの心的態度
- b 社会的地位や年齢などの話者の属性

後者はこれまで変異理論で社会変数として取り扱われてきたものである。前者の方は、むしろ語用論で取りあつかわれる意味に近い。シルヴァーステイン (2002: 76) では、語用論の研究対象には、目的、話者の意図にかかわる「合目的的機能」と、「或る特定の言語形態の一回的な偶然の生起あるいはその言語形態の体系的な指標的価値」を表す「指標的機能」があることが述べられている。(1) a の心的態度、(1) b の話者に関する社会的情報はともに、言語形式によって「指示」されるのではなく「標示」されるので、社会的意味は言語使用の指標的機能によるものと考えられる。

では、「指標的機能による標示」とはということなのだろうか。まず、「標示する」とは、中村 (2001: 104-5) によれば、「無限にあるコンテクスト的要因のうち何を解釈に関与させるか」を示すことであるという。つまり、「指標 (indexicals)」と呼ばれる言語形式は、ディスコース実践 (= 言語を用いる行為) の解釈において、さまざまなコンテクスト要因のうちどれに関与させるかを示すのである。たとえば、「今日は暑いーわ／ぜ」の文末助詞「わ」や「ぜ」のように、「非指示的指標」と呼ばれる言語形式は、「柔らかさ」、「荒々しさ」とでも言えるような言語形式により直接的に標示される社会的意味を伝える。そしてその社会的意味は、「男の話し手」、「女の話し手」のような意味を間接的に構成するが、この間接的な意味は社会的・文化的慣習により、「柔らかさ」、「荒々しさ」が性別と関連づけられている (という知識を持つ)

ことにより、ジェンダーなどの社会カテゴリーや特定のアイデンティティと結びつけられることができる（中村2001: 105-6）。

社会的意味の構成がこのような過程をへると考えるならば、(1) b の話者の属性は、これまでの変異理論で社会変数として取りあげられてきたものとは、じつはかなり異なることがわかる。ジェンダー、階層などの社会カテゴリーは、言語形式が直接標示する社会的意味ではなく、「社会的意味を媒介にして間接的に構成される特徴」なのである（中村2001: 106）。たとえば、上述の「男の話し手」、「女の話し手」は、社会において「柔らかさ」、「荒々しさ」が性別と関連づけられていなければならない。すなわち、「男の話し手」、「女の話し手」は社会的意味を媒介にして間接的に構成された意味であるといえる。

2.3 社会的意味の生成の場とその具体的姿

上述のように、言語的には社会的意味は、言語形式の指標的標示機能によるものとみなすことができる。この意味はつぎのような社会的過程をへて作られていくものと考えられる。Eckert（2000）によれば、言語変異の社会的意味は、話者がコミュニティ・オブ・プラクティス（実践の集団、以下 CofP）において、社会的実践を行う過程の中で作りあげられる。Meyerhoff（2002）によれば、CofP においては、そのメンバーは相互に関わり合い（mutual engagement）、共同で交渉・協力しながらある活動を行い（share some jointly negotiated enterprise）、そして交渉を行う中で共有のレパトリー（＝資源）をもつようになる。このような集団における社会的実践をとおして、言語形式の社会的意味（たとえば「柔らかい」、「荒々しい」など）が作られる。そして、社会的意味は結果として話者のアイデンティティを構築することになる。このアイデンティティには話者にかんする情報が反映されるので、話者情報にもとづいて社会変数を決めれば、その統計的結果には当然相関関係が見られるはずである。こう考えると、社会言語学的変異の研究は、変異とアイデンティティの関係を探ることだと言える。

Eckert (2000) によれば、変異の社会的意味へ接近するということは、CofP での社会的実践において、彼らが「ことばのスタイル」と結びつける何らかの意味を理解することと同義である。彼女は、変異から連想される社会的意味は、具体的な場所、人々、問題となっている事柄、およびスタイルに関係があり、日常の身近な世間・社会において構築されるローカルなものであることを強調する。この「スタイル」は、Labov の「ことばへの注意 (attention-paid to speech)」や Bell の「オーディエンス・デザイン」のように、コンテキスト要因への「反応 (reaction)」としてとらえられるのではなく、社会的実践をとおして自らのアイデンティティ構築のため言語 (変異) が記号論的資源 (resource) として利用された結果のプロダクトである。その意味では、社会的意味の具体的な姿はスタイルに見ることができるのである。そのため、Eckert (2004) は社会的意味を探るためには、個別の言語変数ではなく、スタイルを出発点として研究を行うべきだと主張する。

2.4 ローカルからグローバルへ：社会言語学的風景

Eckert は、アイデンティティとその表出形としてのスタイルの構築が CofP というローカルな集団においてなされることを示した。アイデンティティの構成は、ある個人が複数のアイデンティティをもつとしても、基本的に CofP 単位で行われると考えてよいが、個々の CofP は近隣の地域社会や学校、職場などの集団の中に存在するので、アイデンティティの構築はその CofP がふくまれる上位集団からの影響を強く受けるはずである。この上位の社会集団は、複数の CofP がかさなり合いながら構成しており、その集団に見られる言語特徴の分布や言語行動にかんする全体像は、「社会言語学的風景 (sociolinguistic landscape)」と呼ばれる。この社会言語学的風景においては、話者集団の社会カテゴリーは、階層、ジェンダー、社会ネットワーク、言語市場などの全体的 (グローバル) な抽象概念でとらえられる社会的に目立つ (salient) 部分と重なる。これらの概念は、変異理論では社会変数として設定されるおなじみのものだが、その定義は必ずしも既定のものではなく、

CofP における変異の社会的意味と相互に影響をあたえあう。その意味では、ローカルな場で形成される社会的意味は、グローバルな社会カテゴリーを参照にしながら、社会カテゴリーそのものの社会的意味も変化させていくのである。

このように考えると、ローカルな CofP で作られる変異の社会的意味は、グローバルな社会カテゴリーとの相互作用であることはわかる。しかし、たとえば文末助詞の交替が「男／女の話者」という意味を伝えるのならば、変異の意味は社会集団がもつ何らかの指向性とかかわりがあるはずである。そしてそれは、その社会、集団の歴史的・文化的経緯とふかく関係し、その中で作り上げられ集団全体に共有されてきた意見・思想の傾向だと思われる。

3. 言語イデオロギーと言語変化

3.1 指標性理解のシステムとしての言語イデオロギー

社会的意味の構築は、言語のもつ指標的標示機能とローカルな CofP という場における社会的実践によるが、実践を通して個人、集団のアイデンティティが形成される過程では、その途中で参照される言語にかんする社会通念が必要になる。この社会内で通用する信念は「言語イデオロギー (language ideology)」と呼ばれる。Silverstein (1979:193) は、これを「使用者が言語の構造とその使用についての合理的な理由づけとして、または正当化・弁明として述べる、言語に対する信念」と定義する (Milroy 2003:161より引用)。また、このイデオロギーが対象とするのは、言語を使用する際に話者たちが「言語行為に持ち込む言語形態、意味、機能、価値」など言語全般におよぶ (シルヴァースティン2002:76)。Milroy (2003) は、このイデオロギーは社会的に目立つ集団の特徴と見なされる変種・言語形式への反応、態度・意識としてあらわれるが、この集団は必ずしも階層やジェンダーなどの社会カテゴリーである必要はないと言う。つまり、話者が集団の社会言語学的構造 (= 社会言語学的風景) をどのように理解しているかの具現化とみなされるべきものと考えられる。

では言語イデオロギーは、言語変異の社会的意味、すなわち話者のアイデンティティ構築の資源となるが、この社会的意味の構築にどのようにかわるのだろうか。この問題を前節で述べた言語の指標性とのかわりで考えてみたい。Milroy (2003: 161)は、言語イデオロギーは「言語に本来そなわった指標性を理解するためのシステム」という考えを示している。言語は本質的に指標性をもつ。しかし、指標的標示によって何らかの意味が伝えられるのであれば、その解釈を確実なものにするために働く指標性の解釈システムが必要である。また、発信者の側からすれば、どの言語形式をどのように使えば、自分の意図する結果を生み出すことができるかも、このシステムを資源とすることで達成できるものである。言語形式の指標的標示機能により示される社会的意味は、結果的には話者のアイデンティティをあらわすが、言語イデオロギーはアイデンティティ構築の参照枠組みとし機能していると考えられる。

3.2 イデオロギーの変化と言語変化

このように話者のアイデンティティ構築に言語イデオロギーは資源となるが、中村 (2001) によれば、両者の関係にはふたとおりある。ひとつは、アイデンティティ構築が言語イデオロギーの価値観を遵守する場合である。この場合、言語イデオロギーによって期待されるアイデンティティが再生産され、イデオロギーそのものは維持されることになる。もうひとつは、言語イデオロギーに示される価値観を逸脱したアイデンティティ構築が行われる場合である。中村のことは借りれば、これは支配的イデオロギーの「転覆」であり、このような逸脱が集団内に広まり採用されていけば、イデオロギーの変化につながる。もちろんイデオロギーの変化は、変異の社会的意味であるアイデンティティ構築に影響をあたえるので、その結果言語変化を起こす可能性もある。

中村はふれていないが、もうひとつアイデンティティと言語イデオロギーの関係がある。イデオロギーそのものの勢力の弱化もしくは消失である。

Milroy (2003) はその例として, Labov の1963年の報告では島民アイデンティティがおもな要因だった Martha's Vineyard 島の二重母音/ay/の中舌化の変異は, Blake & Josey による40年後の実時間調査では音声環境だけが変異の要因になったことをあげている。Milroy (2003) は, 島の経済状況, 社会状況の変化などにより社会の再構成が行われたことが原因で, 40年前にあった島民と本土民のイデオロギー的区別が失われたためだと考えている。つまり, 言語イデオロギーの変化は, 島の社会言語学的風景に変化を生じさせたのである。

この例から, われわれは, 社会的意味であるアイデンティティ表出のために言語変異が果たす役割と, そのアイデンティティ構築の動機となる言語イデオロギーの重要性を知ることができる。その関係は以下のように図示できる。

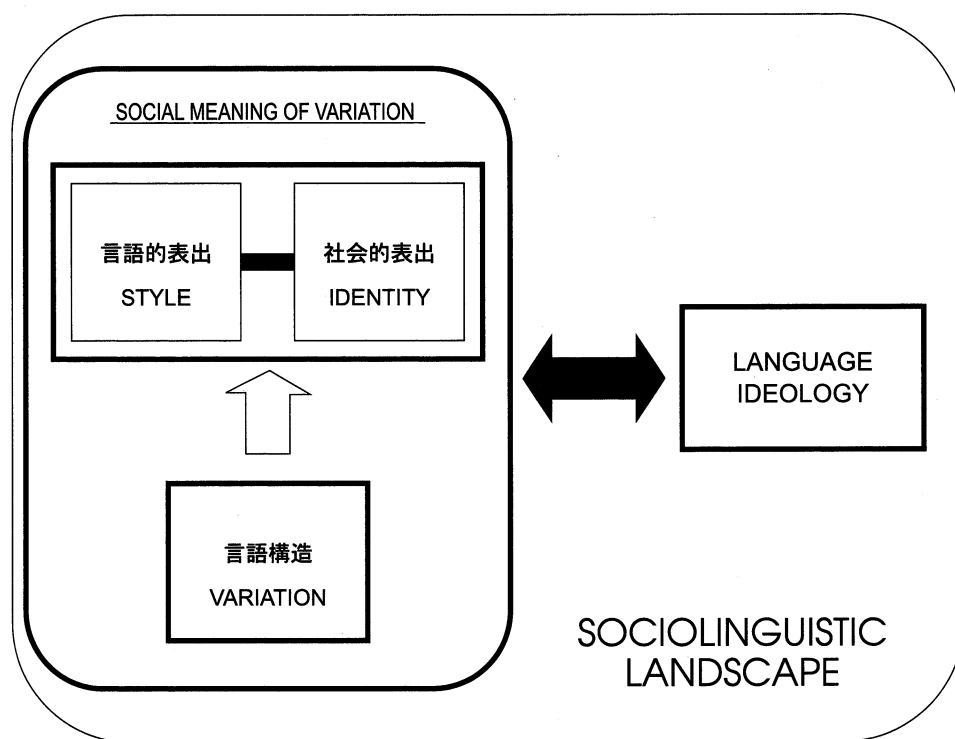


図1 社会言語学的風景における変異の社会的意味と言語イデオロギーの関係

言語変異そのものは構造的な概念である。ある特定の変異形が使用されることにより, 言語的にはスタイルが構成される。また, 変異形の使用により話

者の社会的アイデンティティが表示される。このように変異の社会的意味は、具体的な言語表出であるスタイルによってわれわれに知覚されることになるが、社会的に表出されるのは話者のアイデンティティである。そしてこれは、言語イデオロギーを参照することにより、輪郭があきらかになる（解釈される）意味でもある。アイデンティティの構築は、イデオロギーを参照にするが、どのようなアイデンティティが構築されるかにより、イデオロギーの変化、弱化、消失などにつながる。その意味では、アイデンティティとイデオロギーは相互に作用し合う関係にある。そして、社会的意味、イデオロギーの変化は、社会内部に見られる「社会的目立ち」の変化としてあらわれ、社会言語学的風景を変えることになる。

4. 社会言語学的風景と変種の形成

このように言語は社会言語学的風景の変化をともしながら、つねに変動している。とくに、移住や階層間の移動などで集団の社会ネットワーク強度が弱い場合には、言語接触の結果、外部からの新しい言語特徴の流入、既存の言語形式の衰退、新形式の形成などにより大きな変動が生じることが多い。本節では新しい方言変種の形成（New Dialect Formation, NDF）を例にとり、これまで述べた変異の社会的意味と言語イデオロギーの点から言語変種の形成について検討してみたい。

NDFについては、Kerswill & Williams（2000）の英国 Milton Keynes や朝日（2003, 2004）の神戸市西神ニュータウンの研究に見られるように、一般に移住による新しいコミュニティの形成に合わせて起きる現象である。Milton Keynes と西神ニュータウンは、どちらも既存の地域が発展したのではなく、住宅地の開発により住民が移住してきたため、厳密な意味での地域社会在来の方言は存在しない。このような場合には、住民たちの日常の相互作用をとおして地域の新しい変種が作り上げられることになる。この言語接触による変種形成の過程を、朝日（2004）が示す非過去否定辞形「ーナイ」、「ーン」、「ーヘン」と過去否定辞「ーナカッタ」、「ーンカッタ」を例に、変異の

社会的意味と言語イデオロギーの点から取りあげてみたい（図2を参照されたい）。

西神ニュータウンでは、移住第1世代である中年層においては、非過去、過去のいずれも出身地の如何にかかわらず、全国共通語形の「ーナイ」、「ーナカタ」が使用される。出身地別に見ると、兵庫県出身者は非過去形では「ーナイ」、「ーン」、「ーヘン」のすべての形式が使用されるが、「ーン」の使用は他の2形にくらべると半分以下である。他地方出身者の場合は、非過去3形の使用が認められるものの、共通語形の「ーナイ」が圧倒的である。また過去形においては、兵庫県出身者は共通語形「ーナカタ」が100%なのに対し、他地方出身者は「ーナカタ」が多数ではあるものの「ーンカタ」の使用も一定数認められる。これに対して第2世代の若年層では、過去形では共通語形「ーナイ」より「ーン」、「ーヘン」が、また非過去形でも同じく共通語形「ーナカタ」より「ーンカタ」の使用が圧倒的に多くなる。この傾向は親の出身地に関係なく見られる。つまり、移住第1世代では過去、非過去ともに共通語形が、第2世代では非過去、過去ともに共通語形ではない形式が優勢になるという結果である。接触の初期（つまり第1世代）には出身地の違いが使用される語形の種類に反映されているが、その一方で第2世代になると、使用される語形の使用率には若干の差異は認められるものの、全体の傾向は同じであり、ニュータウンの言語使用のパターンが定着しつつあることが示されていると言える。

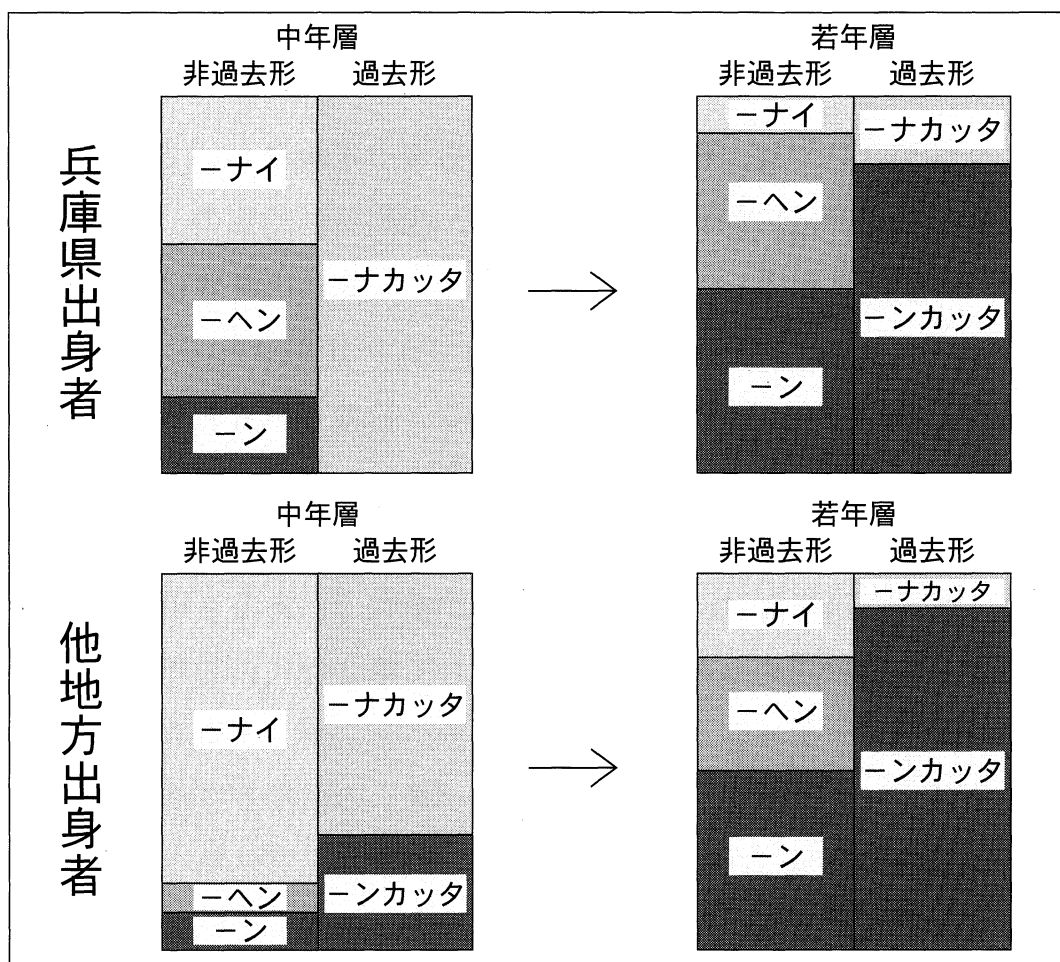


図2 兵庫県出身者と他地方出身者の否定辞の使用の比較 (朝日2004)

この結果は、変異の社会的意味と言語イデオロギーの点からは次のようにとらえることができる。まず、接触初期の段階では、ニュータウンの社会言語学的風景には出身地による集団間の差異（つまり優勢な語形のちがい）があったが、第2世代になると出身地による差異はほぼ失われ、「ニュータウンアイデンティティ」とでも呼べるものが姿をあらわしてきたと考えられる。言い換えれば、ニュータウン住民の間に新たな言語イデオロギーが形成され、それを資源にアイデンティティの構築が行われていると見ることができる。しかも、若年層で非共通語形の使用が増加していること、とくに関西圏では弱体化していた否定辞「-ン」の復活とそれにとまなう「-ンカッタ」の勢力伸長からは、アイデンティティの構築には地域のマーカーとなりうる形式が具体的な資源とされることがわかる。このように新たな言語イデオロギー

が形成されることにより、社会言語学的風景には「ニュータウン集団」という新たな社会的目立ちがあらわれるのである。

5. おわりに—今後の課題—

前節で述べたように、新しい変種の形成過程は社会言語学的風景におけるイデオロギーとアイデンティティ構築の相互作用によるものという解釈が可能である。とくに言語イデオロギーの点からは、Milroy (2003) が提示するイデオロギー動機(ideologically driven)とイデオロギー非関与(ideology-free)の言語変化を認めることができる。しかしながら、この視点には問題もある。

たとえば、言語イデオロギーそのものはローカルな場で形成されるが、現実の言語変化には標準語化、ネオ方言化などの地域を越えたグローバルな現象が見られる。これらの現象にアイデンティティの構築と言語イデオロギーが説明要因となりうるのかという問題がある。また、これに付随して、標準語化の進度、程度に見られる地域差が、変異の社会的意味、言語イデオロギーという視点から説明が可能かという点も問題となる。たとえば、関西、福岡のネオ方言ではいわば共通語の「取り込み」とみなされる現象が多く観察されるのに対し、鹿児島ของネオ方言の現状は、アクセントなどの音調面以外はむしろ変種の「取りかえ」に近い。これらの地域差の説明にアイデンティティやイデオロギーがどの程度有用なのか、イデオロギー動機／非関与といった区別が有効なのかなども検討されねばならない。さらには、松田 (2004) で示されるように、言語変化とはそもそも何かということにも大きくかわる問題である。これらの問題にどのように取り組むかは今後さらに検討が必要である。

【注】

- ¹⁾ Chambers (2003: xix)は「従属(言語)変数と独立(社会)変数の相関が、社会言語学の中核である」と述べる。
- ²⁾ Milroy (1987)は、Labovの数量的手法が「相関社会言語学」と(軽蔑して)呼ばれることがあること、またLabov自身もその手法が意味のない相関を求める研究を氾濫させることになるのではないかと危惧していたと述べている。

【参考文献】

- 朝日祥之 (2003) 『言語変種の形成過程に関する社会言語学的研究－ニュータウンを事例にして－』 博士論文 大阪大学大学院文学研究科
- (2004) 「ニュータウン・コイネの形成過程に見られる言語的特徴－動詞の否定辞を例として－」 『日本語諸方言に見られる中間言語的変異の研究－言語変異理論の立場から－』 (平成13-15年度科研費報告書) 62-75.
- Chambers, J. K. (2003) *Sociolinguistic Theory*. Oxford: Blackwell.
- Eckert, P. (2000) *Language Variation as Social Practice*. Oxford: Blackwell
- (2002) Constructing meaning in sociolinguistic variation.
<http://www.stanford.edu/~eckert/thirdwave.html>
- (2004) The Stylistic Turn: Getting serious about the social meaning of variation. LINGUIST List: Vol-15-712
- Labov, W. (1972) *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Kerwill, P. and Williams, A. (2000) Creating a new town koine: children and language change in Milton Keynes. *Language in Society*, 29(1), 65-115.
- 松田謙次郎 (2004) 「年齢と内的要因からみえるもの－拡大恒速度仮説の展開－」 『日本語諸方言に見られる中間言語的変異の研究－言語変異理論の立場から－』 (平成13-15年度科研費報告書) 11-20.
- Meyerhoff, M. (2002) Communities of practice. In Chambers, J., Trudgill, P. and Schilling-Este, N. (eds.) *The Handbook of Language Variation and Change*. Oxford: Blackwell.
- Milroy, L. (1978) *Observing and Analysing Natural Language*. Oxford: Blackwell.
- (2003) Social and linguistic dimensions of phonological change: Fitting the pieces of the puzzle together. In D. Britain and J. Cheshire (eds.) *Social Dialectology: In honour of Peter Trudgill*. Amsterdam: John Benjamins.
- 中村桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』 勁草書房
- シルヴァースティン, M. (2002) 「言語とジェンダーの文化：構造・語用・イデオロギーが交差する領域」 小山亘・徳地慎二訳 『社会言語科学』 第4巻第2号 70-107.
- Weinrich, U., W. Labov, and M. Herzog (1968) Empirical foundations for a theory of language change. In W. P. Lehmann and Y. Malkiel (eds.) *Directions for Historical Linguistics: A Symposium*. Austin: University of Texas Press.